燃える熱情に動かされている民兵の諸君よ、戦士たちにパンと軍需品を確保するために人知れず働いている無名の英雄である諸君よ、諸君は、ナポレオンがピラミッドの前で、あの有名な言葉の中でいったように、《二十もの世紀がわれわれを見つめている》のを忘れてはならない。全世界がわれわれの行動を監視している。われわれは、協同した無敵の力であることを知ろう。同時に匹敵するもののない勇敢さとあらゆる面での公正さの、模範となろう。仲間たちよ、戦列につけ！　ファシストの怪物を完全に粉砕しよう！　七月十九日は新しい時代の始まりを印した。過去の平和はもはや存在しない。われわれは、血の潮の中で新しいスペインを建設するであろう。革命の象徴、自由への熱烈な欲求の旗印、FAI万歳！　反ファシスト闘争の戦線万歳！

FAI半島委員会

1 『革命的サンジカリズムと共産主義、ピエール・モナット文書』（一九六九年）を参照せよ。

2 ホセ・ペイラッツ『スペイン革命中のCNT』二巻（一九五八年）からの抜萃。

3 Angel Pestaña（1886—1937）　時計工、冶金工労働組合書記から一九一四年にCNTの全国書記となる。サルバドール・セギとともに、彼は、一九一六年から一九二三年の間のスペイン・アナルコ・サンジカリズムの高揚の礎となっていた。一九三一年以後、CNT内における、《三十人派》と呼ばれる改良主義的潮流の中心的活動家、そして除名される。彼は一九三四年にサンジカリスト党を創立し、一九三六年に同党の代議士となる。病死する。

4 アンヘル・ペスターニャの記録。

5 Salomon Lozovsky（1878—1952）　労働者、一九〇三年にボリシェヴィキ、一九〇九年に亡命し、一九一七年までフランス労働運動の中で活動する。織物労働組合の指導者、そこで彼は、反対派の組合活動を指導する。一九一九年以来、卑屈な大勢順応主義に属する。一九二一年から一九三七年まで、赤色労働組合インターナショナル議長。

6 ホセ・ペイラッツ、前掲書、よりの抜萃。

7 Armando Borghi（1882—1968）　アナルコ・サンジカリストの中央組織、イタリア労働組合同盟の書記長。一九二〇年にソヴェト・ロシアにゆき、そこでレーニンと会う。彼の最も重要な書物は『アナーキーの半世紀（一八九八—一九四五年）』である。

8 A・スーチー『共有化、スペイン革命の建設的な事業』（一九三七年四月、一九六五年再版）からの抜萃。スーチーについては、一一三ページを見よ。

ドゥルーティ（1896－1936）と絶対自由主義戦争

ブエナベントゥーラ・ドゥルーティ[1]

ブエナベントゥーラ・ドゥルーティ・イ・ドミンゴ、鉄道員サンティアーゴとアナスターシャの息子は、一八九六年七月十四日にレオンで生まれた。

五歳の時、彼は小学校に通い、そして、九歳の時、リカルド・ファンフール先生が指導していた、ミセリコールディア街の中学校に通った。先生が、彼の修学の終わりにドゥルーティに与えた評価は、「文学の才能のある、注意の散漫な、しかし高貴な感情を持つ生徒」であった。

十四歳の時、彼は、徒弟としてある機械工場に入り、十分な教育を受けたのち、十八歳でそこを離れる。その教育がよかったことを、彼は、トーリオのマンタリャーナで初めて働き、洗鉱機を組立てながら実証する。それから彼は、機械組立工として北部鉄道会社に入る。第一次世界大戦が勃発した一九一四年にはそこで過ごしている。

レオンが聖職者と貴族支配の一中心地であったにもかかわらず、そこにはすでに、スペイン社会党と労働総同盟の労働者たちの一つの核が存在していた。ドゥルーティは、サラリーマンになった日から、労働総同盟に属していた。彼をつねに不正に立ち向かわせようとする、彼の叛逆的な性格は、つねに仕事仲間に彼の真価を認めさせ、鉱業の中心地の中で、彼を人気あるものにしていた。彼は、組合の集会に参加し、彼の活動家的な闘争的な気質を養った、職場について語った。この時期に、一九一七年八月の革命的なストライキが起こり、それは、レオンでは、労働者の解雇と指導者の弾圧によって終わった。全国労働連合のレオン支部は、やはりこのストライキの中から生まれた。ドゥルーティは、そこの人々の

闘争性に惹かれ、彼が以来全生涯を通じて属することとなった、この労働組合中央組織に加入する。鉄道会社の職場から解雇され、レオンの経営者からボイコットされて、彼は、スペイン北部の革命的吸引力の中心、アストゥーリアス地方のアナルコ・サンジカリストの影響の核、ヒホンに定住するため立ち退かねばならなかった。ヒホンで、彼にアナキズム理論を教えたマヌエル・ブエナカサ[2]と友情で結ばれる。ヒホンでの滞在の二カ月のち、彼はフランスに亡命しなければならなかった。なぜなら、一方では仕事を見つけることが不可能であったし、また他方では、すでに二十一歳であるにもかかわらず、兵役を果たすために出頭しなかったからである。

パリでは、三人の人々が彼に影響を与える。セバスチャン・フォール、ルイ・ルクワン、エミール・コタン[3]である。これらの人々は、永遠に彼の生涯と結びつきつづける。

スペインに残っていた友人たちが、彼に便りを送っていた。ヨーロッパを覆っていた革命的な息吹きが、彼をうながして一九二〇年の初めにスペインに帰らせる。サン・セバスチャンで、彼は、この町のCNTの建築労働組合書記長であったマヌエル・ブエナカサと再会する。到着して数日後、彼は機械工として働き始めた。そのことが彼に、バルセロナ、マドリード、サラゴサから来た他の労働者活動家たちと友情で結びつかせることとなった。アナキスト・グループの基礎が、サン・セバスチャンで築かれた。ドゥルーティが最初に入ったのは、〝裁きをするもの〟(ジュスティシエロス)と名づけられたグループであった。しかし、サン・セバスチャンの住民は、《何一つ決して起こさない》住民であった。そしてドゥルーティは、居住地を変える決心をする。ブエナカサが、当時CNT全国委員会書記長でバルセロナにいた、アンヘル・ペスターニャへの紹介状を彼に与えた。

彼は、労働者の闘争の重苦しい空気が支配していた、サラゴサに足を止めた。ソルデビーラ枢機卿は、サラゴサの知事とともに、連合の活動家たちを虐殺し、サラゴサのCNTにけりをつけるために、バルセロナから職業的殺人者のグループ(ピストレロス)を呼んだ。反動は激烈であった。フランシスコ・アスカーソ[4]も加わっていたCNT活動家たちの一グループは、プレディカドーレスの監獄に投獄され、重罪に処せられるのを待っていた。サラゴサの労働者たちは、囚人たちの釈放を要求して、ゼネラル・ストライキを始めた。この出来事は、ドゥルーティとその友人たちのサラゴサへの到着と同時に起きた。闘争が新たにひろまった時、囚人たちは釈放された。この空気の中で、アスカーソとトレース・エスカルティン[5]の親密な友、ドゥルーティは、一九二二年一月に、バルセロナにいって暮らすことを決心した。

バルセロナは、当時のサラゴサ同様、闘争の極点に位置していた。《殺人体制》は、労働者の指導者たちを狙い、街頭で彼らを殺した。経営者たちと警察に支持され

たこの攻撃に直面して、労働組合員たちは、同じ方法による以外に応戦することができなかった。

闘争は、最善の人々を選び抜いた。そんなふうにして、今度は〝連帯者たち〟(ソリダリオス)と呼ばれた、ドゥルーティの新しいグループが生まれた。ガルシア・オリベール、グレゴリオ・ソブレビエーラ[6]、等々の人々がこのグループに加盟した。グループは、そのメンバーたちの無謀な行為のおかげで、間もなく経営者たちのギャング行為に対する闘争の中枢となった。一九二三年三月十日、よく知られた活動家、偉大な演説者で優れた組織者であった、サルバドール・セギ[7]が暗殺された。この時、闘うアナキストはいっそう緊密な組織に結集しようとし、サラゴサのアナキスト・グループ〝自由な同意〟(リブレ・アクエルド)は、四月にマドリードでのアナキストの会議を招集した。

ドゥルーティは、会議に出席することと、エドゥアールド・ダート[8]に対する襲撃(一九二一年)ののちに投獄された人々と会うことの、二つの使命を持ってマドリードにいった。彼の首には賞金がかけられていたので、彼は偽名を用いて、ダート事件で容疑者とされたため囚人となっていたジャーナリスト、マウロ・バハティエルラに会いにいった。彼は会議に出席し、その出口で逮捕された。というのも、非合法活動の疑いをかけられたためであるが、数日後に釈放された。(彼の本当の名を知らずに)彼の逮捕を扱った警視は、内務大臣の譴責を受けた。このことのあとで、バルセロナの警察長官は、「マドリードの警視が無経験だったので、怖るべき男ドゥルーティは、司法官をだましおおせた」と指摘している。

蜂起行動を目指す全国革命委員会が、バルセロナで結成された。ソブレビエーラは、この委員会のメンバーの一人となった。それは、無数の問題に直面することを強いられた時期であった。CNTには金がなかった。その最良の活動家たちは、牢獄にいるか、追求されていた。ギャング行為は、セギの死のあとも、カタルニャの首都でも他の都市でも猛威を振るった。グループ〝連帯者たち〟が、半島の多くの地点、サラゴサ、ビルバオ、セビーリャ、マドリードに密使を送ったのはこの時であった。一九二三年の五月と六月に、全国的に大きな動揺が起きた。ソルデビーラ枢機卿がサラゴサで殺された。この殺しにつづいて、フランシスコ・アスカーソとトーレス・エスカルティンが告訴された。そして、前者のみが逃亡することができた。

ビルバオの元知事、経営者のギャング行為の強力な手先、フェルナンド・ゴンサレス・レゲレールは、レオンで祭の夜に殺された。

蜂起が準備されていた。人々は覚悟を決めていたが、武器が足りなかった。全国革命委員会は、そのいくつかをブリュッセルで購入し、それらをマルセーユで船に積み込んだ。しかし、それらは不十分なものであることが明らかになり、そのため一九二三年六月、ドゥルーティとアスカーソは、相当量の武器を買入れるためにビルバ

オに向けて出発した。彼らは、ある技師の仲介で、エイバールの工場でそれを手に入れた。船荷はメキシコ向けであった。しかし、一たび沖にでると、船長は、ジブラルタル海峡に向けて航路を変更し、埠頭に横付けにすることなく、バルセロナで荷揚げをする命令を受けるはずであった（ビルバオは大西洋岸にあり、バルセロナは地中海岸にある）。時は素早く流れた。工場は注文品を引き渡すのを遅らした。そして、不幸にも武器は、プリモ・デ・リベーラ将軍のクーデタ（一九二三年九月）がすでに成就されてからしか、バルセロナに到着しなかった。積荷を下すことができずに、船は、工場に武器を返すために、ビルバオに戻らねばならなかった。

グレゴリオ・ソブレビエーラは暗殺された……。リカルド・サンス[9]は、ガルシア・オリベールとともに徒刑場にいた。グループは破壊された。グレゴリオ・ホベール[10]、セグンド・ガルシア、ドゥルーティ、アスカーソは自由の身でいた。しかし、スペインにとどまることは彼らにとってきわめて危険であった。そのため、彼らは亡命する決心をしたのである。

彼らのフランス滞在はあまり長いものではなかった。しかし、ちょうどイタリア、フランス、亡命ロシアの活動家たちとともに、宣伝計画を完成する時に当たり、結局（イタリア、フランス、スペインの）三カ国語による、イデオロギー的な、そして闘争のための著作と一雑誌を刊行することを主な任務とする、国際的出版社の創設をなしとげた。一九二四年の末頃、ドゥルーティとアスカーソは、キューバに向けて出発した……。彼らはそこで、スペイン革命運動のための煽動活動をした。ドゥルーティとアスカーソが公然と発言をしたのは初めてであった。ドゥルーティは大衆的な雄弁家であるように見えた。彼らは、危険な扇動家として警察から追求されて、間もなくこの国を離れねばならなくなり、つねに落ち着かない生活を送り始めた。彼らは、とどまることなく旅をし、メキシコ、ペルー、チリーのサンチャゴと、いずれにせよ短期の滞在をし、その後、ブエノスアイレスにいくらか長い間足をとどめるが、そこでも彼らは、何よりもまず危険にさらされていた。彼らは（ウルグァイの）モンテビデオに向けて発ち、そこからシェルブール行きの船に乗ることができた。しかし、沖にでてしまうと、船は何度も航路を変えることを強いられた。それはのちに、《幽霊船》と名づけられる。結局、彼らはカナリヤ諸島に到着し、そこで、彼らをイギリスに連れてゆくこととなった、ほかの船を借りるために下船した。彼らは、一九二六年の四月、秘密裡にシェルブールに到着する。そこから彼らはパリにゆき、そこでルジャンドル通りのホテルに宿泊する。ある朝そのホテルを出ようとして、彼らはフランス警察によって逮捕された。この逮捕の公式の理由は、「七月十四日にフランスの首都を訪問するはずの、スペイン王アルフォンソ十三世に対する陰謀を企てた」ということであった。

同じ年の十月、彼らは、武器の不法所持、外国人取締令への反抗とその違反のため、軽罪裁判所に出頭した。この裁判の間に、彼らは、「スペインを支配している独裁制度と闘うために全力を尽くして活動する権利を」自分たちは授けられている、「そのために、故国で君主制が崩壊することを誘発する目的で、自分たちは、アルフォンソ十三世を襲うことを計画した」と述べた。

アルゼンチンが、ドゥルーティ、アスカーソ、グレゴリオ・ホベールの引き渡しを要求した。スペインも同じことを求めた。なぜなら、スペインは、彼らをソルデビーラ枢機卿の暗殺者として告訴していたからである。フランス政府は、アルゼンチンとスペインの要求に応じようとした。当時、フランス・アナキスト同盟は、アメリカ合衆国で電気椅子に送られかけていた、サッコとヴァンゼッティ釈放のため組織的な活動を展開していた。ルイ・ルクワン、フェランデル[11]、セバンスチャン・フォールを中心的活動家とするもう一つの組織的活動が、スペインの三人のアナキストたちの釈放のために開始された。彼らは、自分たちの裁判の間、ルイ・ルクワンによって熱心に弁護されていたのである。ルクワンは、事実、フランスの政界、知識層ならびに労働者階級を動員した。パリでの動揺は大きかった。多くの新聞が弁護活動を支持し、一九二七年七月に、スペインの三人のアナキストは釈放されたのである。

フランスから国外追放され、ベルギー、ルクセンブルグ、スイス、ドイツで滞在を禁止された彼らには、イタリアとスペインへの国境のみが開かれていた。それは、彼らにとっては確実な死をもたらすものであった。ソ連邦は彼らに保護を申しでた。しかし、アナキストにとって受け入れることが不可能な、条件付であった。彼らには、一つの解決策しか残されていなかった。警察をだましてフランスにとどまることである。したがって、彼らは、密かにパリ周辺に立ち戻った。秘密裡に、ドゥルーティは、ロシアの革命家ネストル・マフノーと親交を結んだ。彼らは、ありうるはずもないような生活を送り、空しくドイツに移ろうと試みていた。彼らは、フランスに、もっと正確にはリオンにとどまらねばならなかった。そこで彼らは、偽名を用いて働いた。警察に発見され、彼らは改めて六カ月間投獄された。釈放の日にこれからすることを尋ねた一ジャーナリストに、ドゥルーティは、いくらかユーモアをまじえて答えた、「またやり直すさ！」と。

一九二八年秋、彼らは、遂に秘密裡にドイツに移ることに成功し、そこで、彼らの立場を政治的亡命者として合法化しようと努めた、ルドルフ・ロッカーとエリッヒ・ミューザム[12]と接触を持った。政治面できわめて有力な人物たちに訴えたにもかかわらず、ロッカーらは失敗した。もしドゥルーティ、アスカーソ、ホベールが警察の手に落ちたとしたら、直ちにスペインに送られたであろうことは確かであった。ドゥルーティとアスカーソ

は、偽のパスポートを手に入れ、メキシコへの船に乗ることができると思われる、ベルギーにゆくことを決心した。彼らは経済的困窮の中にあり、それを詩人ミューザムの偉大な友人、有名なドイツ俳優アレキサンダー・グラナッハに打ち明けた。彼は、当時彼が持っていたすべての金をドゥルーティらの自由に供した。この援助のおかげで、彼らは国境を越えた。しかし、メキシコへの船には乗らなかった。スペインから来たCNT全国委員会の密使が、彼らに体制の崩壊を伝えたからである。

そこで二人の友は、偽のパスポートを手に入れたのち、ベルギーにとどまることを決めた。彼らは、一九三一年四月十三日までベルギーに残っていた。それは、彼らの活動家生活の中で、彼らが比較的平穏さを経験した時期であった。彼らはそれを利用して、彼らの知的、革命的素養を高め、ウーゴ・トレーニ、カミロ・ベルネーリ、ヘム・デイ[13]のような国際的な活動家たちが加わっていた、自由愛好委員会と協力した。共和国が出現すると、ドゥルーティはスペインに帰った。共和国は早々に希望を裏切った。革命貫徹集会が、一九三一年五月一日、バルセロナの美術展覧会場で開かれた。一万人のデモがその結果として行なわれ、デモ参加者たちが、自分たちの要求を伝えようとして地方政府の官邸まで、街頭を練り歩いた。《囚人たちに自由を、緊急の社会改革を》が要求であった。軍と民警がこのデモを蹴散らした。死傷者がでた。しかしドゥルーティは、軍の兵士たちに彼らの武器を民警に対して向けさせるよう決心させたのである。

ドゥルーティの人気は、半島できわめて高かった。彼の名のみが、CNTの集会の成功を保証した。適切にいえば、彼は優れた演説者ではなかった。しかし彼は、大衆を征服することができたし、事例をあげて彼らに社会的不正を暴露することができた。

一九三一年四月から一九三六年七月十九日まで、彼は、スペインで行なわれた、社会的大闘争のすべてに参加した。彼は、フィゴールスの事件の際に異彩を放ち、カナリヤ諸島に、フェルテベントゥーラ島内のプエルト・カブラに、流刑にされ、一九三二年の二月から九月までそこにとどまらねばならなかった。彼はまた、一九三三年一月の革命運動に積極的に参加し、改めて同じ年の一月から八月まで投獄された。一九三三年十二月に、ドゥルーティは全国革命委員会に加わった。しかし、一九三三年十二月から一九三四年七月まで、彼はまたブルゴスとサラゴサで投獄され、一九三四年十月五日から一九三五年半ばまで徒刑場に送られた。それから彼はまた、同じ年の九月に下獄し、一九三六年二月の選挙の数日前にやっと釈放された。

約七百の代表が出席した大会、サラゴサでのCNT第三回大会の行事は、一九三六年五月一日に始まった。ドゥルーティは、ガルシア・オリベール、フランシスコ・アスカーソとともに、織物労働組合の代表団に属してい

た。この最後の大会は建設的であった。革命が近づいていたのである。CNT全国委員会は、ファシストの陰謀を告発した。しかし、人民戦線によって選出させられた政府は、軍人たちの策動を終わらせることができなかった。

ドゥルーティは、革命的活動家たちと労働者階級の間で、きわめて大規模な運動を煽動した。そのため、地方政府（カタルニヤ自治政府）[14]大統領コンパニスは、CNTとの会談を懇請し、それによって彼がCNTと地方政府間の連絡委員会設置を決めた。ドゥルーティとアスカーソは、この委員会に参加した。委員会は、民衆を武装することを強調したが、政府からは善処の言葉しかえられなかった。指導層のその態度を前にして、数ダースの銃を奪うためにバルセロナ港に碇泊していた貨物船の襲撃が、決定された。それらは、CNTがすでに持っていた若干の武器と、兵器商から手に入れた武器に付け加えられるものであり、それは、三万五千の兵士からなる、バルセロナの守備隊に対抗する唯一の方法であった。

抵抗部隊は、七月十九日、午前五時に街頭に出た。そして、月曜（二十日）の午後、十七時に、ガルシア・オリベールは、バルセロナ放送で、民衆は圧倒的多数の敵との闘いで勝利を得た、と告知した。これほどの速さで国家権力が消滅したことはかつてなかった。（ファシストの蜂起は十七日なので）七十二時間足らずで、国家はもはや名のみしか存在しなかった。それに残されていたわずかな象徴的な武力も、民衆の中に速やかに合流した。CNTとFAIは、バルセロナでも同地方でも、状況の絶対的な主人であった。

実在しない地方政府の大統領コンパニスは、事実を認めざるをえず、権力の譲渡（まさしく譲渡という言葉を用いなければならない）のために、CNTとFAIとの会談を懇請した。この歴史的な会談について、ガルシア・オリベールの記録が残されており、それは正確な状況を説明し、民兵中央委員会と呼ばれる新しい権力機関がいかにして生まれたかを示している。

この委員会がとった最初の措置の一つは、アラゴン地方に即時に送らねばならない部隊の編制であった。この部隊は、ドゥルーティ＝ファラースと呼ばれた。なぜなら、司令官ペレス＝ファラースは軍事代表であり、ドゥルーティは政治代表であった。七月二十三日、部隊は希望していたよりも少ない人数でレリーダに向けて出発した。というのも、部隊は、原則として一万人をあてにしていたのである。レリーダで革命権力が樹立されると、部隊は、カースペに向かい、それから、サラゴサからほぼ三十キロの距離にある戦略的要地、ブハラロスにゆき、そこで落ち着いた。部隊は、多くの村を占領し、敵を後退させた。

ドゥルーティがその司令部をおいたブハラロスの《あばらや》は、ジャーナリストたちや知名人たちの魅惑の的となった。ジャーナリストたち、労働者活動家たち、知識人たち、セバスチャン・フォールやエマ・ゴールド

マンのような政治活動家たちが、そこを訪問した。

部隊が《セバスチャン・フォール》と名づけていた国際的グループは、戦死したエミール・コタン、シモーヌ・ヴェーユ[15]のような知名人たちをその戦列に加えていた。

戦争がひろがるにつれて、アラゴン戦線は、その絶対自由主義的な精神のために、中央政府によってつねによりいっそうボイコットされた。ドゥルーティは民兵中央委員会に話した。委員会は、彼がおかれている状況について知らされたのち、マドリードにゆき、武器か手形を懇請するよう彼に忠告した。ドゥルーティは、首相であり軍事相であった社会主義者ラルゴ・カバリェロ[16]に会うために、マドリードにいった。カバリェロは彼に、武器を購入し、カタルニャの軍需工業を操業させるための、百八十億ペセタの借款を保証した。しかし、中央政府は約束を守らず、アラゴン戦線は、その制覇がきわめて重要であったサラゴサを占領することができず、その場しのぎの手段で敵と闘わねばならなかった。

一九三六年十—十一月のマドリードへのフランコ派の攻勢の際、政府と軍の最高首脳部を恐怖がとらえた。人人は首都の陥落を信じた。政府は、彼の威信が戦闘員たちの士気を高揚すると考えて、ドゥルーティを呼んだ。したがって、彼の部隊はマドリード防衛のために呼ばれたのである。そうして、首都の住民の歓呼のうちに、ドゥルーティは、十一月十二日、部隊の先頭に立って到着した。休息する時間すら与えられずに、彼は最も危険な面を受けもたされた。十一月十二日から彼の死の日まで、彼は一息つく暇もなかった。

十一月十九日、午後二時頃、ドゥルーティは、肺の真中に《流れ弾》を受けた。その時彼は、ファシストたちが立てこもっていた大学都市を見渡す砦、クリーニコ病院の前にいたのである。彼は、リッツ・ホテルにおかれていたカタルニャ民兵病院に大急ぎで運ばれた。彼はそこで、外科手術を受けたが、翌十一月二十日の午前六時に死んだ。

激烈な闘いに加わり、敵の機甲部隊と戦っている、マドリード前面の共和派戦闘員たちの士気を傷つけないために、ファシズムへの抵抗の象徴となっていた彼の死は、まず秘密にされ、遺体はこっそりとバルセロナに運ばれた。十一月二十三日にカタルニャの首都で行なわれた彼の葬儀には、五十万以上の人々が参列した。

共和国政府とCNTとがともに、ドゥルーティの死の混乱した状況について流れ始めた噂をはっきりと否認し、彼は確かに敵前で倒れたことを断言しなければならないと考えたのも、やはり反フランコ派の士気を動揺させないことを配慮してのことであった。

数年を経てみると、公式の解釈を守ることは難しい。彼の死にまつわる謎は、すっかり残されているのである。ほかに、三つの解釈が主張されている。

(1) ドゥルーティは、アナキスト活動家たちに殺されたらしい。というのも、マドリードで共産主義者たちの傍らで闘うことを余儀なくされ、彼は彼らに接近しがちであったらしいからである。これは、最もありそうもない仮説である。

(2) ドゥルーティは、CNTの改良主義的な右派のメンバーによって抹殺されたらしい。右派は、闘争からあらゆる革命的性格を取り上げるために、他の共和派諸勢力との政治的妥協を強化しようとしていたらしいのであって、このことは、徹底した革命闘争の支持者、ドゥルーティの意志に反することであった。

(3) 最後に、ドゥルーティは、スターリンの命令でゲーペーウーによってやられたらしい。というのも、彼の絶大な人気は、スペイン共産党の陰険な策謀の障害であったからである。

今日、これらの解釈のあれこれのために、客観的な選択をすることは不可能である。しかしながら、探偵が扱うすべての謎と同様に、人々は、ドゥルーティの死は誰に利益をもたらしえたか、という問いから出発して、真実を探ることができる。

ドゥルーティの精神[17]

ドゥルーティ部隊は、夜のうちに、ほとんど言葉もなく、ドゥルーティの死を知った。生命を犠牲にすることは、ドゥルーティの同志たちの間では日常の事柄であった。「奴はわれわれの中で一番いい奴だった」という言葉が囁かれた。「われわれは復讐する」という叫びが、夜のうちに一斉に放たれた。それこそ仲間たちがいったことである。この日の合言葉は、《復讐》であった。

ドゥルーティは、匿名の働きの力を深く理解していた。匿名と共産主義は、一つのものでしかなかった。同志ドゥルーティは、左翼のスターたちの一切の虚栄の外で行動していた。彼は同志たちとともに暮らし、彼らの傍らで仲間として闘った。輝かしい模範、彼はわれわれを熱狂で満たした。われわれは、将軍を持ってはいない。しかし、闘士の情熱、深い謙虚さ、優しい眼の中に輝く革命の大義のための全体的な謙譲さが、われわれの心に溢れ、山の中でわれわれのために生きつづけていた彼の鼓動とわれわれの鼓動とを、いっしょに脈打たせるのであった。われわれはいつも、《進め、進め!》という彼の声を聞いていた。ドゥルーティは将軍ではなかった。彼はわれわれの同志であった。彼には礼儀が欠けていた。しかし、われわれのプロレタリア部隊においては、誰も革命を利用しはしなかった。誰も宣伝はしなかった。われわれは、一つのこと、革命の勝利をしか考えなかった。

同志たちは彼のテントに集まった。彼は、彼らに彼の処置の意味を説明し、彼らとともに討議した。ドゥルーティは命令しなかった。彼は納得させたのである。ある処置が理由のあることだという確信のみが、明確な決定

的な行動を保証した。われわれの間では、各自が自分の行動の理由を知り、それと一体化していた。そのために、各自は、その行動をぜひとも成功させようとした。同志ドゥルーティは、われわれにその模範を示したのである。

兵士は、恐怖感と社会的劣等感で服従する。兵士は、意識の欠如によって闘う。そんなわけで、兵士たちはいつも、彼らの社会的な敵、資本家たちの利益のために闘った。ファシストの側で闘った哀れな奴らは、その不憫な一例である。民兵は、何よりもプロレタリアートのために闘う。民兵は、勤労階級の勝利を実現することを願っている。ファシストの兵士たちは、彼らの敵、凋落する少数派のために闘っている。民兵は、彼自身の階級の未来のためにである。民兵はだから、兵士よりはずっと聡明に見える。ドゥルーティ部隊は、軍隊式行進によってではなく、その理想によって規律を正していた。

部隊が進駐したいたるところで、共有化が行なわれた。土地は共同体に与えられた。貴族の奴隷たち、農業プロレタリアたちが自由な人間になった。人々は、田園の封建制から自由共産主義に移った。住民は、部隊によって食糧と衣料とを補給された。部隊は、地方に滞在した間、村の共同体と合体した。

革命は、軍隊化がなしうる以上の厳しい規律を部隊に強制した。各自は、われわれの闘争の中心にあり、過去においてと同様に未来においてもわれわれの闘争の原因である、社会革命の結果に責任を感じていた。私は、将軍たちないし軍隊式の敬礼が、現在の必要にずっと適合する態度をわれわれに教え込むとは思わない。そういいながら、私は、ドゥルーティと同志たちの思想を伝えている、と確信しているのである。

われわれは、われわれの昔からの反軍国主義、つねに資本家にしか利益をもたらさない図式的な軍国主義に対するわれわれの健全な不信を、否認しない。プロレタリアたちが、自己教育することを妨げられ、社会的劣勢のうちにおかれてきたのは、まさしく軍国主義者の図式的な傾向に援けられてであった。軍の図式主義は、プロレタリアたちの意志と知性を粉砕しなければならなかったのである。要するに、われわれはいま反乱した将軍たちと闘っている。そのことは、その事実自体によって、軍の規律の価値のいがかわしさを証明している。

われわれは、いかなる将軍にも服従しない。われわれは、ほかの多くの改革と並んで、まさしくプロレタリアの人格の最大限の教育を可能とする、社会理想の実現を追求している。軍隊化は、反対に、その人格の堕落に好都合な手段であったし、今もそうである。人は、ドゥルーティ部隊の精神を、部隊がつねにプロレタリア革命の娘であり擁護者でありつづけるであろうと理解する時、把握する。部隊は、ドゥルーティとCNTの精神を体現している。ドゥルーティは、部隊によって生きつづけている。彼の部隊は、彼の遺産を忠実に守るであろう。部

隊は、革命の勝利のために、すべてのプロレタリアとともに共同して闘う。そのようにしてわれわれは、われわれの死んだ同志、ドゥルーティの思い出に栄誉を捧げるものである。

マドリード防衛（一九三六年十一―十二月）[18]

バレンシアへの政府の移転は、不安がる人々や呑気者たちの気持を引き締めさせた。それは、統一や規律についての単なる言葉を、マドリード防衛委員会のアッピールに応える責任と発意の実際の飛躍におきかえた。各自は、なさねばならぬ何かがあることを理解し、そのために自分自身を頼みとしていた。各自は、真面目な抵抗のためには他人を当てにできることも理解していた。政府への信頼の讃辞で終わる、英雄主義を強いる演説はなくなり、人々は、効果的に動き、模範を伝染させ、広汎な大衆の活動を開始させた。大臣たちの出発は、一つの浄化であった。

ドゥルーティの、カタルニャの五千の戦闘員を伴った到着。のらくら者、芝居がかった連中、偽の革命家たちを手厳しく扱った、ラジオを通じて彼が放った猛烈な力強い声明。彼が各マドリード人に行なった銃やつるはしの提供、塹壕を掘り、バリケードを築くことへの全員への勧誘、これらすべては、政府の嘘をつく公式声明や演説が生じさせることのできなかったであろう、燃えるような、楽しい、一種の幸福感を生みだすのに役立った。それまでは、防衛も、士気を動揺させる恐怖の無益な現われの排除も、組織には行なわれていなかった。ドゥルーティと防衛委員会は、マドリードの人々を人間として扱った。彼らは、人間として行動した。マドリードで労働者階級の過激分子を包含していたCNTは、その全メンバーを動員して、防備のための兵団とそのほかの類似の組織を創るのに模範を示した。

以下の声明は、マドリードの日刊紙『CNT』を通じて発表された。

「反ファシストの立場の運命とその責任が結びついている、マドリード労働組合地区連合は、共和国の首都周辺の反乱者たちへの闘いに決定的な形で寄与するために、昨月曜日、統制下にある全労働者を動員した。直接戦争にかかわりのないすべての仕事は、一時停止が宣せられた。今日、政府に協力するためマドリードで武装しているもの、それは連合の四万の労働者である。

ファシストの企ては、もしそれが、毎日次第に強力になり有効になるわれわれの武器によって前もって打ち敗られないとしても、プロレタリアの肉の城砦の前で粉砕されるであろう。われわれの戦列から、今やすべての裏切者は取り除かれている。七月の日々に、闘う自発性と革命的な熱情をもってファシストの巣窟を攻略したのは、民衆である。裏切者を決定的に絶滅するもの、それ

もまた、今度は三ヵ月の闘争によって戦争の労苦に慣れた、民衆でなくてはならない。同志たちよ、全力を。われわれは勝利を得るであろう！」

マドリード防衛は、連合主義的な絶対自由主義的な方法と政府中心的なスターリニスト的な方法との対決をもたらした。経験によって、アナキストの戦列の中で実施された人間的な制度が、闘争上の価値と業務の望ましい組織化を何一つ害するものではないことが証明された。その結果、ロシアの厳しい監督の下で軍隊化された相当数の国際プロレタリアたちが、自分の部隊を離れてドゥルーティと戦列をともにするようになった。《焼くべき肉》としてではなく、自覚した市民として扱われたいという欲求によって、あらゆる傾向のものが、CNT＝FAIの民兵たちに引きつけられたのである。CNTの組織者たちは、教育者としての自分たちの役割を自覚し、魂の預かり手であり革命の名誉であることを感じて、反軍国主義と自律に関する諸原則についての、彼らの立場の相当部分を改めて採用した。人民軍の枠内での民兵の獲得物を強固にする配慮によって考えられた、CNTの宣伝は、より自由なより革命的な性格を帯びた。そうして、十一月付の声明がだされた。

「わが民衆の心理を知るわれわれは、革命の兵士が、権利と義務についてではなく、服従と懲罰についてのべている軍規の厳格な規律の下で、魂のない機械に変えられてしまうなら、有効な形では闘えないことを知っている。古臭い公式はここでは承認できない。というのもそれは、自衛する民衆によって規定されたものではないからである。それは、自分たちの利益と特権とを守るために武力を活用する、搾取者階級の擁護と民衆の隷属化をはかるものである。

七月十九日に消滅したスペイン軍は、その軍規の厳格さがどのようなものであろうと、その規律によっても、その勇気によっても、その組織によっても少しも光彩を放つものではなかった。ブルジョア共和国はもはや、その支配者たちに再会してはならないし、新しい軍を再建してもならない。そうではなく、古い思想や時代遅れの公式と縁を切らなくてはならない。われわれが建設しつつあるプロレタリア革命は、その発展と対立する、国民的な、政治的な、軍事的ないし社会的な残存物の中から、建築資材を引き出すことしかすべきではない。

革命的規律は、拘束ではなく、意識的な義務にもとづいて生まれる。プロレタリア革命社会において、軍事的ないし経済的な面で、自分の任務を成就することを拒否する同志が受けるべき最も厳しい懲罰、それは、軽蔑と孤立を、最終的には寄生者への場所を用意していない社会からの排除を、受けることである」

最後に、われわれは、われわれが伝えた議論のあとに

人々が期待しうる、実際的な結論をかなりよく要約している以下の文書を、読者に見ていただかねばならないと考える。それは、ドゥルーティ部隊の赤と黒との旗の周りに集まったドイツの戦闘員たちから出されたもので、民衆の利益のためにそのメンバーによって統制されるはずの軍事組織の枠内における、すべての革命家にとっての最小限の要求の一覧表を提示している。

「民衆の軍隊と兵士評議会。

ドゥルーティ部隊の国際グループのドイツ人同志たちは、一般的に軍隊化の問題、特殊的にはこの部隊の中での問題について、断乎たる態度をとった。同志たちは、戦線の人々と緊密ないかなる関係もなしに作製され、現に実施している、軍隊化の原則を非難している。彼らは、これまでとられた措置を臨時のものと見なし、果てしない混乱の現状を終わらせるために彼らができるだけ速やかに設定することを要求している、新しい〝軍規〟が創設されるまでのものとして、それらを受け入れている。ドイツの同志たちは、新しい軍規の編纂に当たって以下の要求を考慮することを提案している。

1　敬礼の廃止。
2　全員に平等な俸給。
3　言論の自由（戦線新聞）。
4　討論の自由。
5　大隊評議会（中隊ごとに三代表を選出）。
6　いかなる代表も司令官の役割を果たさない。
7　大隊評議会は、中隊代表の三分の二が同意するなら、兵士の全体集会を招集する。
8　各部隊（連隊）の兵士たちは、部隊の信任しうる三人からなる代表団を選出する。それらの信任された人人は、いつでも総会を招集しうる。
9　彼らの一人は、オブザーバーの資格で（旅団の）参謀部に派遣される。
10　この機構は、軍全体を兵士評議会によって総括的に代表することにいたるまで、延長されねばならない。
11　総参謀部はまた、兵士総評議会の一代表を参加させなくてはならない。
12　兵士のみからなる戦場軍法会議。下士官に対する告発の場合は、軍法会議に将校一人を加える」

いいえ、ドゥルーティは死んじゃいない

エマ・ゴールドマンによる

一ヵ月前に私が会ったばかりのドゥルーティが、マドリードの街頭で闘いつつ死んだ。

私は、スペインにおける革命的なアナキズム運動のこの偉大な戦士を、彼について書かれたものを読んで知っていた。

私はバルセロナに着いた時、ドゥルーティとその部隊について、たくさんの逸話を聞いた。そのことが私に、

アラゴン戦線へ、ファシズムに対して闘っている勇敢な民兵たちの指導的人物がいる戦線へゆきたいという、強い欲求を抱かせた。

日が暮れる頃、私は、起伏の多い道を車で抜けた長い旅で完全に疲れ果てて、ドゥルーティの参謀部に着いた。ドゥルーティとの数分が、大きな慰め、元気回復、励ましとして私に役立った。槌で石に刻まれたような、筋肉の逞しい男、ドゥルーティは、私がスペインに着いて以来会ったアナキストたちの中で、明らかに最も優れた風貌をしていた。彼の絶大な気力は、彼に近づく人々のそれぞれに同じ効果を及ぼすと見受けられたほどに、私に深い感銘を与えた。

私は、狭い室内でまさしく活躍中のドゥルーティに会った。人々がいったり来たりしていた。電話が絶えずドゥルーティを呼んだ。そして同時に、彼の参謀部のために木の骨組みを建設しつづけている労働者たちの、がやがやいうすさまじい喧騒は止むこともないのであった。

この騒々しい絶え間ない動きの中で、ドゥルーティは、静かに落ち着いていて辛抱強かった。彼は、生涯を通じて私を知っていたかのように私を迎えた。ファシズムに対する生か死かの闘争を決意したこの人物との心をこめ熱を帯びた会見は、私にとって何かしら思いがけないものであった。

私は、彼の名を持つ部隊の中での、ドゥルーティの強烈な個性と威信について語られるのを、いくたびも聞いた。私は、軍人たちのおかげではないだけによけいに、いかなる手段によって彼は、まったく経験も訓練もない一万の志願兵を結集するのに成功したのか、を知りたい好奇心に駆られていた。ドゥルーティは、私、古くからのアナキスト活動家である私が、そうした質問をしたので驚いたように見えた。

「私は生涯を通じてアナキストでした」と彼は私に答えた。「また、そうありつづけることを望んでいます。というのも、私は、私を将軍に変えること、軍隊精神による間抜けな規律の下で私の部下たちに命令することは、私には実に不愉快なことである、と思われるからです。彼らは、彼らの生命をわれわれの反ファシスト闘争に捧げるつもりで、彼ら自身の意志で私のところにやってきました。私は、つねにそれを信じていたように、自由を信じています。責任の感覚の中で理解された自由を。私は規律を不可欠のものだと思います。しかしそれは、共通の理想と強い友愛の情によって動かされる、自律でなくてはなりません」

彼は、部下たちの信頼と愛情とを手に入れていた。というのも彼は、決して自分を部下たちよりも上にいると考えたことはなかったからである。彼は、彼らの中の一人であった。彼は、彼らのように食べ、眠った。しばしば彼は、彼よりも必要に迫られている病人や弱者のために、自分の分け前を放棄していた。彼は、あらゆる戦闘の中で彼らとともに危険を分かち合った。そのことは、

彼の部隊ともどもの、ドゥルーティの成功の秘密の一つでしかない。彼の部下たちは、彼を熱愛していた。彼らは彼のすべての命令にしたがっただけではなく、ファシストの陣地を占領するために、最も危険な行動の中で、つねに彼につきしたがってゆくつもりでいたのである。

私は、ドゥルーティが翌日に予定していた攻撃の、前夜に到着した。指定の時刻に、ドゥルーティは、残りの民兵たちと同様に、モーゼル銃を肩に吊して、行軍を開始した。いっしょに、彼は四キロ先廻りして敵を遮ったのである。彼はまた、敵が逃走中に放棄した、夥しい数の装備を手に入れるのに成功した。単なる精神的な平等の模範が、おそらくドゥルーティの影響力の唯一の説明ではない。もっと別のものがあり、それは、反ファシスト戦争の意義を民兵たちに理解させた、彼の偉大な能力であった。そして、その意義こそ彼の存在を支配し、彼が最も貧しいものにも最も無能力なものにも教えたものである。

ドゥルーティは、彼の部下たちが、彼らが戦線に最も必要な時に休暇を求めた場合に、彼に提起される難しい問題について私に話した。彼らが彼らの指導者を知っていたこと、彼らが彼の決定を、鉄の意志を知っていたことは明らかである。しかしまた、彼らは、彼の心の底に隠されている共感や優しさをも知っていた。部下たちが彼に、彼らの故郷での、彼らの父の、彼らの妻の、彼らの子の、病気や苦しみを語る時、いかにして抵抗するのか。

……彼は、仲間たちの要求に決して無関心のままでいることはできなかった。今や彼は、革命防衛のためのファシズムに対する絶望的な闘争の中に入っていた。各自がその部署についていることが必要であった。それは、本当に難しい任務であった。彼は、辛抱強く悩みを聞き、その原因を探し、精神的ないし肉体的な支障が不幸なものの心をとらえているすべての場合に、その解決策を提示した。過度の労働、不十分な食糧、清らかな空気の欠乏、生きる喜びの欠如、である。

「同志よ、君は、君や僕、われわれ皆が耐えている戦争、それは革命を救うためのものだ、革命は人々の貧しさや悩みを終わらせるために行なわれるものだ、とは思わないかね。われわれは、われわれの敵ファシストと闘わなくてはならない。われわれは、戦いに勝たなくてはならない。君は、その戦争に重要な一役を果たしている。君はそう思わないかね、同志よ」

時々、ある同志が、こうした理屈を聞くのを拒んだ。彼は、戦線を放棄することを固執した。

「よろしい」とドゥルーティはいった。「しかし君は、歩いて立ち去ることになるだろう。君が君の村に着いた時、皆は、君が勇気を欠いていたこと、君は君自身、自ら自分に強制した義務を成就する前に逃げだしたこと、を知るだろう」

これらの言葉は、素晴らしい結果を生んだ。人々は、

とどまりたいといった。戦線におけるドゥルーティ部隊を維持するのに、いかなる軍事的な厳格さも、いかなる拘束も、いかなる服務上の懲罰もなかった。そこには、隊員たちを駆り立て、自分と一体であると彼らに感じさせる人物の、大きな力しかなかった。

偉大な男、アナキスト、ドゥルーティ。指揮し教えるために宿命的に定められていた人物。物柔らかな真心ある同志。すべてが一人の中にあった。そして今、ドゥルーティは死んだ。彼の心臓はもはや鼓動していない。彼の堂々たる体は、巨木のように倒れた。しかしながら、ドゥルーティは死んではいない。一九三六年十一月二十二日の日曜日、ドゥルーティに最後の敬意を表したいく十万の人々がそれを示している。

いいえ、ドゥルーティは死んじゃいない。彼の熱烈な精神の火は、彼を知り、彼を愛した人々すべてを照らした。それは、決して消えることはあるまい。すでに大衆は、ドゥルーティの手から落ちた松明をふたたびかかげた。勝ち誇った大衆は、ドゥルーティが多年にわたって照らしていた道を、それをかざして進みつつある。ドゥルーティの理想の頂きへといたる道。彼が自分のすべてを捧げたもの、それは、あの理想、アナキズム、ドゥルーティの生涯の偉大な情熱、であった。彼は誠実であった、彼の最期の一息まで！　いいえ、ドゥルーティは死んじゃいない！

ドゥルーティは語る[19]

私は、私の部隊に満足している。同志たちは、十分に装備されており、時が来れば、全員、優れた機械のように動く。そのことによって私は、彼らが人間であることを止めた、というつもりはない。そうではなく、戦線にいるわが同志たちは、誰のために、何のために、闘っているかを知っている。彼らは、革命的であることを自覚している。彼らは、多かれ少なかれ約束されている新しい法を擁護するために闘っているのではない。そうではなく、世界の、工場の、職場の、輸送手段の、彼らのパンの、新しい文化の、獲得のために闘っているのである。彼らは、彼らの生命が勝利にかかわっていると知っている。

これは私の意見だが、われわれは、そうであることを状況が要求しているので、革命と戦争とをまったく同時に行なっている。革命的な措置は、バルセロナにおいてのみとられたのではなく、戦線でもやはりとられている。われわれが占領したすべての村々では、われわれは、革命を発展させ始めた。それは、われわれの戦争の最善のものである。そのことを考える時、私は、私の責

任をよりいっそう理解する。最前線からバルセロナまで、われわれの大義のための戦闘員しかいない。全員は、戦争と革命のために働いている。

現状によって要求される最も重要なスローガンの一つは、規律である。人は、それについて多くを語る。しかし、そのために尽力することは稀れである。私にとって、規律とは、人々が責任を持つという概念以外の意味を持たない。私は、残虐行為に、苛酷さに、機械的行動に導く規律、兵営の規律の敵である。私はまた、自由は戦争という現在の時期には考えられない、自由は臆病者の頼みの綱である、という誤った合言葉をも認められない。われわれの組織の中では、CNTは規律の中の最善のものを強制する。組合員たちは、責任の負担を受け入れるために、選出された同志たちによって提案された、委員会によって行なわれた決定を認め、遂行する。戦争の間、人々は、選出された代表たちにしたがわねばならない。いかなる作戦も、ほかの方法では行なわれえない。もしわれわれがためらう人間たちを前にしていると知ったなら、その時は、彼らの良心に、彼らの自尊心に語りかけよう。その方法によって、われわれは、彼らを立派な同志とすることができよう。

私は、私にしたがっている同志たちに満足している。私は、彼らもまた、私に満足していることを望んでいる。彼らには何一つ欠けていない。彼らは、食べるものも読むものも持っている。彼らは、革命的な討論をする。のらくら者は、わが部隊にはいない。隊員たちは絶えず塹壕を掘っている。

われわれは戦いに勝つであろう。同志たちよ！

ロシアの労働者たちに[20]

心情と思想においてわれわれに身近な数多くの国際的な革命家たちが、ロシアで、自由にではなく、政治的収容所や徒刑場で暮らしている。彼らの中の多くが、戦線の最前列で、スペインにおける共同の敵と闘うために来ることを望んでいる。国際プロレタリアートは、彼らが釈放されないことが納得できないし、ロシアがスペインに送ろうとしていると思われる、武装した援兵ないし人員が、スペインの革命家たちの行動の自由の何らかの放棄を含む、値踏みの対象になることが納得できない。

スペイン革命は、ロシア革命とは別の経過をたどらなくてはならない。それは、《権力に唯一の党を、その他のものは牢獄に》、という公式にしたがって発展してはならない。そうではなくそれは、戦線の部隊がだまされないようにするただ一つの公式、《すべての傾向を活動に、すべての傾向を共通の敵に対する闘争に。そして民衆は、最も気に入った制度を選ぶであろう》に、勝利を収めさせなくてはならない。

最後の訓辞[21]

もし地方政府による軍隊化がわれわれをおびえさせ、鉄の規律をわれわれに強制するために行なわれるのなら、それは間違っている。われわれは、われわれの士気とわれわれの団結を理解するために、法令の起草者たちが戦線に加わるよう促すものである。ついでわれわれは、それと後方の士気と規律とを比較しにゆくであろう。

民兵はよし！　兵士は真平だ[22]！

労働者民兵は、反ファシスト軍事行動に関して、決定的な役割を果たした。彼らは、作戦のあらゆる重圧に耐えた。論理は、民兵が軍の中に統合されるのではなく、忠実な軍部隊が民兵の中に合体することを要求する。しかしながらそれは、政治的無関心の方向にバランスを傾け、民兵の軍隊化を促進するものとなる動員の試みに着手しながら、マドリードとバルセロナの《当局》が顧みないでいるものである。カタルニャでは、その動員の試みは失敗した。

……バルセロナの街々に、一九三三年、三四年、三五年徴募の新兵たちが溢れた。彼らは、将校たちにいかなる信頼も持たず、兵舎居住という古い軍隊の観念から解放されていると自認し、部隊に帰ることを拒否していた。多くのこれらの若者たちが、民兵に登録し、ある人人は、直ちにサラゴサに出発することすら望んだ。彼らの見解を表明するために、彼らは、彼らのうちの一万人を集める大集会を組織し、そこで、彼らは次の動議を可決した。

「われわれは、われわれの市民としての革命的な義務を

果たすことを拒否しない。われわれは、サラゴサのわが兄弟たちを解放しにゆくことを願う。われわれは、制服を着た兵士ではなく、自由の民兵であることを望む。軍が民衆にとって危険なものであることは明らかになった。ただ大衆的な民兵のみが、公衆の自由を保護する。民兵はよし！　しかし兵士は真平だ！」

ＣＮＴは、マドリード（共和国政府）とカタルニャ地方政府に荷担した。一方、新兵たちの声明は、直ちに行動に現わされた。数千人が自発的に民兵への登録をしにいった。そして、階級ないし革命的意志を問題にしない動員は、《叛逆者に対する》闘いに関しては放棄された。

しかしながら、マドリードとバルセロナは誤ちを悟るべきである。問題は、《叛逆》運動の単なる抑圧ではなかった。われわれは、ファシストの企てがその出現を速めるものでしかない、社会現象の前にいるのである。それに敵対しようとするものすべては、一掃されるであろう。反対に、指導者がその力を理解し、それに行動の自由を与えるなら、彼らは取返しのつかない禍いを避けることとなろう。

ＣＮＴは、若い新兵たちにいった。「問題は義務の遂行を諸君が怠ることにはないのだから、われわれは、諸君の権利を支持するであろう。諸君は、兵士としてではなく、民兵として闘うであろう」。この解決策に兵士たちは賛成した。

われわれは、スペインの諸政府が彼らにその権利を拒否しないであろうと考えたい。それは必要である。諸政府は、拘束の下で闘う軍は、結局は敗走に達すること、その証拠は、ワーテルローも帝国の瓦解も避けられなかったナポレオンの軍隊にあることを、知らなくてはならない。志願兵の軍隊は、フランス革命の戦士たちのそれのような、英雄的叙事詩を背後に担っている。

ＣＮＴは、民兵たちに武器を取ることを訴えながら、誰も逃げ隠れしないのを知っている。なぜなら、闘争中の脱走は裏切りだからである。

正規軍か絶対自由主義的民兵か？

八月の終わり頃、街々には、ポスターや旗やバッジが溢れた。臨時の募兵事務所は、全力をだして活動した。ファシズムと反ファシズムが、島々を、中立地帯を、説明しがたい交錯を形成していたその時、人々は、それらの新兵たちに何をさせようとしていたのか？　密集した大衆は、フランコによって大急ぎで集められた、モール人やルクテー[23]に敵対するためのものか？　それとも、革命的な方法での戦士か、反乱事実についての宣伝員か、ゲリラか、義勇兵か。

軍事専門家たちは、意見が分かれていた。しかし、奇妙なことには、民間政治家たちは皆、大衆の軍隊化に賛成する傾向があり、おそらく、戦闘意欲が十分でない、《時代の必要性》についてあまりにも自覚していない、

と思われるのを恐れていたのである！

……[24]反乱を起こした将軍たちの軍国主義が、それに固有の闘争形態をスペインの革命家たちに強制するにいたるのか、それとも逆に、わが同志たちは、軍事的戦線の清算と社会革命が全スペインへ拡大されてゆく行動の方式を対置しつつ、軍国主義を解体するにいたるのかどうか、自問してみることが次第に必要に思われた。

ファシストたちが手にしえた成功の諸要素は、以下のものであった。すなわち、装備の豊かさ、規律の極度の厳しさ、完全な軍事組織化、ファシズムの警察組織の援けをえて民衆に対して行使されるテロル。成功のこれらの諸要素は、死命を制しうる諸地点への大部隊の輸送を伴う、陣地および連続する戦線での戦闘の技術によってその価値を維持されていた。民衆の側においては、成功の諸要素は、正反対の分野に属していた。すなわち、人員の豊かさ、個人と集団の発意と情熱的な攻撃性、国中の労働者大衆全体の積極的な共感、ファシストに占領された諸地方での、ストライキやサボタージュという経済的武器。敵が自由にしえたものよりもずっとそれ自身として優れていたもの、それらの精神的な物質的な力の完全な活用は、強襲や待ち伏せや国全体に拡大したゲリラによる全般的な闘争によってしか、実現されえない。

スペイン人民戦線の若干の政治的分子たちがはっきりと心に抱いていた意志は、同じ次元での軍事的戦術を対置しつつ、軍部隊と物資の集中とを大々的に用いて《正規の形の》戦争をしつつ、義務的な動員を布告しつつ、唯一の簡潔な指令権の下に戦略計画を実施しつつ、いずれにせよ完全にファシズムを模倣しつつ、軍国主義と闘うことであった。以上にのべたものが、《赤軍》の創設を要求する、という点でボリシェヴィズムの影響を受けていた同志たちの意見である。

この態度は、われわれには、一見解である以上に危険なものと思われた。ボリシェヴィキの赤軍は、平和時の産物であり、反動に対する勝利は、何よりもまず、スペインのゲリラと類似した闘争方法を伴った、《パルチザン》グループの所業であったことを忘れてはならない。

現在においては、基本的な問題は、ゲリラに向いているパルチザンの全体、民兵を、職業的軍隊の諸特徴を帯びた正規軍に変えることではない。問題はむしろ、ヨーロッパの主な軍隊で実施されている、小戦闘グループの戦術概念や小隊訓練に着想をえつつ、戦闘グループに適当な装備（自動火器、手榴弾、小銃等々）を与えながら、民兵組織にふさわしい専門技術を養成することである。ほかの形で行動すること、それは、スペインの反ファシスト陣営についてはそのあらゆる手段がまだこれから創設すべき、ナポレオンふうの戦闘の最終的な勝利を期待することであろう。それは、最終的な勝利を無期延期し、現在の陣地を永続化し、もしわれわれ固有の武器をわれわれが完全に活用できるなら、あらかじめわれわれのものである勝利を、偶然にまかせることであろう。

プロレタリアートの革命的飛躍を絶滅し永遠に抑圧しようとする唯一の目的のために、ブルジョアジーのファシスト部門と和解しつつ、民衆を裏切る瞬間を狙っている、待機主義者たちや妥協好きの連中の欲得ずくの掛引きを警戒しよう。

……毎日、新しい民兵招集がバルセロナで行なわれた。定員に達した民兵たちは、手軽な準備の数日ののち、自分たちの装備を受け取り、街頭を行進して首都に別れを告げた。志願兵たちのこの行進の間に、反ファシスト民兵委員会に加盟するすべての組織の本部に、敬意が表明され、そして、出発してゆく同志たちと窓辺やバルコニーに群がる人々との間で、歓呼の叫びが交された。

各部隊は、かかげている標識以上にもっとはっきりした、個別の顔を持っていた。共産主義者と社会主義者の部隊は、ある軍事的な固苦しさ、騎兵小隊と特殊な武器の存在、ほかよりも大人数の組織、歩調をとる行進、あげた拳、によって目立っていた。ＰＯＵＭの部隊、警察とカタルニャ主義者[25]の部隊は、装備の美しさと豊かさのために異彩を放っていた。ＦＡＩとＣＮＴの同志たち、彼らは、合唱もなく楽隊もなしに行進した。

彼らは、果てしない長さの間隔が開いた、まばらで、不揃いで、乱れがちで、突然引き返したりするので一人また一人と途切れる、三つの隊列をなしていた。先頭には、労働者の青い服を着た参謀が一線に並んでいた。それは、著名な労働組合活動家からなっていた。ＣＮＴでは、各組織者ないし宣伝者は、同時に、ゲリラ、行動の男、戦闘員でもあった。バルセロナにおいてすら、昼間は国の経済を管理し、銀行家が放棄した椅子に坐っていた人々が、夜になると民兵のピストルか銃を持って、巣窟がカタルニャの管内にまだたくさん残されていたファシスト分子の清算に、彼ら自身の手で取りかかるのであった。したがって、アナキストの戦列においては、機関銃を扱うものとタイプライターを扱うもの、銃後の人々と戦線の人々との間に、いかなる柵もなかった。職業的な《隊長たち》もいなかった。そうではなく、毎日危険に身をさらした、そしてさらしている、人間の訓練者たちがいるのである。官僚的な専門化はない。そうではなく、完全な活動家たち、頭のてっぺんから足の先までの革命家たちがいるのである。

幅広い大通りを横切って、三つのほっそりした人間の奔流は、彼らとともに、群衆を押し流していた。黒と赤の略帽をかぶり、銃を背負った民兵の周りを、友が、子が、母が、妻が、姉妹が、時には両親の家族が、友人の家族が、行進した。挨拶が交換され、名が呼びかけられ、握手が交され、職場仲間が友愛的な抱擁を送った。部隊に群がり、その隔たりを埋め、燃える心の熱気の中にそれを押しやったのは、全民衆であった。

中央の隊列の途上に、灰色の髪の老婆が立ちふさがっていた。そして通りすぎるもの誰もが、誰彼の区別な

く、立ち去りつつ、その婦人から母親の別れの挨拶を受けた。何百何千という人々が、そうして、力一杯の手短な抱擁、情熱的な不器用な抱擁、FAIのすべての若者を息子として受け入れ、束の間彼らの腕の中にすがり、千たびも出発の痛ましい一瞬をくり返した見知らぬおふくろの、この上ない抱擁を受けていった。その時、一つの叫びがこの群衆から放たれ、鷗の翼のように風に鳴った。《FAI万歳！　無政府思想万歳！》

そして、この叫びを聞いたものは、その時、UGT、CNT、PSUC、党やグループのすべての名は、事物、合言葉、頭文字でしかないこと、しかしFAI（ここでは、人がいっているように《ファーイ》と呼ぶ）は、一人の女であること、婚約者、妻、姉妹、娘、そして、自由への愛で心臓を鼓動させているすべてのものの理想の母であることを、理解する。

……感情の論理だ！　と人はいうであろう。しかし、この論理は、革命のそれではないのか？

動員（一九三六年十月三十日、モンテ・ペラート）に反対するアスカーソ部隊イタリア支隊

アスカーソ部隊の《イタリア支隊》の隊員たちは、スペインの自由の大義と世界の自由の大義に寄与するために、各国から駈けつけた志願兵たちであった。彼らは、民兵制度の転換に関するカタルニャ地方政府によって発布された法令を検討し、反ファシスト闘争の戦線に彼らを導いた大義への彼らの献身を再確認し、ぜひとも以下のことを声明しようとした。

1　問題の法令は、それを布告した当局の発する動員――われわれがその原則についての評価を差し控える応急の措置の義務に服する人々にしか、かかわりのないものである。

2　そのことは、問題の法はわれわれには適用できないであろうことを、われわれに確信をもって確認させる。しかしながら、われわれは、当局がわれわれもその適用を受けうるものと見なす場合には、われわれは、すべての精神的義務から解放されていると考え、われわれの完全な行動の自由を要求することができること――支隊の設立規定そのものも正当な権利をもって破棄しうることを、必要な絶対的な明白さをもって、ぜひとも断言しようとするものである。

バレンシアでの地方会議（CNTの全国委員会および各地方書記の総会）における鉄部隊代表の発言

（部隊によって賛同され、テルエル戦線の、一九三六年十一月十七日付のその機関誌『火線（リニーナ・デ・フーゴ）』に掲載）

鉄部隊は、報告者委員会がCNTの民兵機構に手をつけないことを要求する。

鉄部隊は、その機構、その内部組織を危険にさらすことを強いられている。その点について、議論はさまざまの点をあげなくてはならない。第一に、軍隊化について、なぜなら、すべての部隊の軍隊化を予告する政府の法令があり、軍隊化がすべてを解決すると信ずる同志たちがいるからである。

われわれ、われわれは、それは何一つ解決しないと主張する。

時には戦争の諸問題にまったく無知な、軍の諸学校を出た伍長や軍曹や将校の前に、われわれは、われわれの組織を呈示する。われわれは、軍機構を認めない。鉄部隊やCNTとFAIのすべての部隊や連合に加わっていないほかのものですら、軍の規律は認めなかった。

唯一の指揮権か調整か？

バレンシアにおける集会でCNT、FAI、鉄部隊等等によって提出され賛成された、テルエルや各所の戦線で闘っている部隊間の連絡の任に当たる機構の創設を必要と考える動議の中で、人々は、民間の代表二、各部隊ごとに補佐として軍事全般の専門家一、テルエルの部隊と他の戦線の部隊の連絡の任に当たるはずの民衆執行委員会の軍事代表一、からなる作戦委員会を、代表派遣を通じて形成するために、軍事委員会と部隊委員会の設立を要求した。

つまり、唯一の指揮権と呼ばれるものに反対するわれわれ、われわれは、闘うあらゆる部隊の調整を実例と実践によって普及させる。われわれは、実際に現地の状況を知らない、決して戦場にいったことのない、自分たちが指揮する人々の精神状態をまったく知らない（たとい）その上その無知が軍事技術までは及ばないにしても）、参謀部、大臣が、事務室からわれわれを指揮し、大概の場合突飛な命令をわれわれに与えることを、認めることはできない。そして、われわれはほとんどつねに、軍事代表と参謀部の軍事指揮権の命令にしたがわねばならなかったので、われわれは抗議するとともにバレンシアの前記参謀部の免職を要求する。また、われわれがそれに服従していた長い間、われわれは他の戦線の状況や他の部隊の活動について何一つ知らなかったほど、当惑ははなはだしかった。われわれは、それがどこから来たものか知ることもできずに爆撃を受けた。それゆえわれわれは、マルクス主義者の望むように各中央組織の代表ではなく、各部隊の直接の代表からなる、作戦委員会の創設を要求する。われわれ、われわれは、現地をよく知り、どこにゆくのか知っている代表たちを望む。

軍事委員会の設置は、CNTの、すべての民兵によって認められた。われわれは、個人から出発し、自分たちの間で小さな作戦の手筈を整える、十人のグループを形成する。十のグループの結合が、それを代表する一代表を任命する、百人組を形成する。三つの百人組が一部隊を形成し、部隊は、百人組の代表たちが発言権を持つ、

軍事委員会によって指揮される。

もう一つの点、それは、すべての戦線の調整に関するものである。この調整は、民間代表二、補佐としての軍人代表一、さらに民衆執行委員会の代表からなる、委員会によって実現される。そのようにして、各部隊はその行動の自由を保持しているにもかかわらず、われわれは、指揮権の統一とは同じものではない、各部隊の調整に到達する。

マルクス主義者たちと共和主義者たちは、そのことを望まなかった。というのも、彼らは、各部隊は討議すべきではない、皆は参謀部の命令したことを尊重しなくてはならない、といっていたからである。しかし、参謀部とともに敗北するより、五十の委員会とともの五十回の勝利の方がましであった。

軍階級制か連合主義か?

軍隊化についていえば、われわれは、戦争技術の習得に全生涯を通じて従事した軍人たちは、われわれよりずっと老練であること、彼らの勧告はしばしばわれわれのものより優れていることを、十分認めたいと思う。したがって、われわれは、彼らの勧告を、彼らの協力を受け入れる。われわれの部隊においては、たとえば、われわれが信頼している軍人出身者は、われわれと協力していっしょに活動している。われわれは、ともに、われわれの努力を調整している。しかしもしわれわれを軍隊化するなら、起こりうるのはただ一つのことであり、それは、連合的な機構を兵営の規律に〔移すこと〕であって、それはまさしく、われわれの望まないものである。

人々はまた混成民兵について語る。われわれは、類縁による集団は、今日も明日も、優位に立つはずのものだ、と考える。個人たちは、彼らの思想と気質にしたがって結集すべきである。何らかの同じ形で考える人々が、自分たちの共通の目的を実現するためにその努力を統一すべきである。もし異質な形で各部隊が編制されるなら、いかなる実際的な成果にも到達しえないであろう。

つまり、われわれは、各部隊の独立をいささかも放棄しないし、いかなる政府の指揮権にも服従したいとは思わない。われわれは、第一にファシズムを打倒するために、第二にアナキズムというわれわれの理想のために、闘っている。われわれの行動は、国家を強化するものであってはならない。そうではなく、漸進的に国家を破壊し、政府を無用のものにするものでなくてはならない。

われわれは、人は自分が考えることと違う形で行動できないので、一つの現実である、われわれアナキストの思想に反する何ものをも認めない。

したがってわれわれは、各戦線で闘っているすべての民衆と中央参謀部との調整を樹立するために、われわれの、グループ、百人組ないし部隊委員会、軍人と民間人からなる軍事委員会、という組織を認めることを提案する。

議論の最後の点。それは軍需品の不足である。今まで、われわれの部隊は、国家によってごくわずかな部分を補給されてきた。たとえば、私が代表している部隊においては、それを構成する三千人に対し、わずかに千挺の小銃しか国家から与えられなかった、それ以外のすべては、われわれ自身でそれらを手に入れねばならなかった、その八〇%は敵から奪ったものである、とわれわれはいいうる。つまり、国家、政府、公式諸機関は、武装すること、そして必要な装備を諸部隊に与えることに無関心であった。それは、組織が解決しなければならなかった、そしてバレンシア[26]においては人々がほとんど心をとめなかった、問題であった。組織は、何一つ不足しないように注意しなくてはならない。

人はまた、規律は士気沮喪や脱走を防ぐ、といった。それは確かではない。勇気や恐怖は、数多くの状況にかかわっている。なぜなら、同じ人間が、ある戦闘で恐怖を抱き、他の戦闘で真の英雄として行動することがありうる。規律か無規律か、それは同じことである。というのも、軍隊化された人々が最初に逃亡する人々であることも証明されているからである。危険にさらされた場合、アナキストであれ、マルクス主義者であれ、共和主義者であれ、個人は同じ生存本能に影響され、逃げるか前進する。

俸給の問題

ここには、その解決は組織に属するとわれわれには思われる、もう一つの問題がある。報告者委員会は、民兵は経済的に国家に属さなくてはならない、といっている。これに対しわれわれは、初めCNTの各部隊は、自発的な形で形成され、戦線に向かって出発した、と答えなくてはならない。誰も俸給のことを気にもとめなかった。なぜなら、それらの戦闘員たちが住んでいた村は、彼らの家族たちを援助し、そうしてその生存を確保したからである。しかし、村が家族たちへの食糧補給を断つ時がきて、要求が始まった。われわれはつねに、十ペセタのあの俸給には反対する。というのも、個人は武器で暮らしを立てるのに慣れ、それを職業とするのに慣れがちだからである。この怖れは正当化された。なぜなら、多くのわれわれの同志たちが堕落した、といいうるからである。われわれは、組合が家族たちの必要に応じうるのなら、われわれは十ペセタを放棄する、われわれは何一つ俸給をもらいたくない、そうでなければ、われわれは今までのようにそれを受けつづけるであろう、といいたい。

セゴルベの単一組合は、われわれが組合によって採用された結論にしたがったので、鉄部隊、トーレス＝ベネティート部隊、および動員の集結地であるセゴルベの、

二十三部隊の機構に完全に同意した、と諸君に告げるはずである。そ組合、民兵機構が必要であると認めている。というのも、組合は会議に出席した大多数の代表たちよりもよく判断しえたからで、しかもそれは、われわれの会議における代表として、前哨と協力しながら鉄部隊の中でひと月以上も過ごした同志を持っていたためである。

そして、その意味でわれわれは、われわれCNTの部隊の中で実現されようとしている、指揮権の統一、軍隊化を冷笑する。またわれわれは、鉄部隊のある同志が適切にそういったように、われわれは軍隊化に頼ることなく、すでにわれわれの機構とわれわれの指揮権の統一を持っているので、それを冷笑する。事実、われわれはそれを持っているのである。というのも、われわれは、レバンテ地方の最初のものであり最良のものであり、ファシズムに反抗し、ファシズムが、この地方を（まずセゴルベを、ついでバレンシアを）占領するのを妨げることができたからである。そしてわれわれが最初のものなので、われわれは、鉄部隊がいかに運営されているかを語り、会議に知らせる権利を持っているのである。

民兵、自覚した個人

この演壇で私の前の演説者は、機構について話した。私は、もっとよく問題を展開したい。戦闘の中で個人が果たさなければならない役割を決定する、絶対的な指揮権の統一は、個人の確信以上に、行動の中で有効であろうか？

それというのも私は、われわれは、諸君がすることのできない革命をするため後方に戻っているので、そのため鉄部隊に逆らっている人々、彼らは、自分がいっていることを理解していない、と諸君にいいたい。

ただの民兵は、精神的な、革命的な、国際的な統一をそこに見出すことができるので、わが部隊へやってくる。それゆえ、戦場に最初にゆくわれわれ、われわれは、かつての反動がそうであったように、今日マルクス主義とブルジョア民主主義が、レバンテの革命的陣営の最良のもの、つまり、アナキズム的な、革命的な収穫物を消滅させようとするのを、許すことはできない。

またそれゆえに、われわれは唯一の指揮権を認めることはできない。というのも、軍人たちは後衛にとどまることしかできなかったからである。そして、自分たちの中に軍隊化されたものよりも百倍も優れた諸要素があることを知っている、わがCNTの兄弟たちの士気に感嘆したわれわれ、われわれは、拘束を望まない。われわれは、指揮権の統一なしには戦争に勝つことができないという、あの嘘が援用されることを望まない。

自分たちの赤軍に指揮権を与えるために、おそらく先行のもの同様に宿命的な独裁を創設するために、指揮権の統一を生みだそうとする、旧制度の諸政党のやり方は、革命を危機に瀕せしめるものである。それに対して

われわれは同意することができない。その点について私は、地方委員会によって不幸にも不当な方向に進められているこの会議全体は、明確に改良主義的な、政治的な空気の中で進行しつつある、といわねばならない。そして、それゆえに、人々はわれわれの少数の声を聞かなくてはならないのである。というのも、やがてわれわれは皆、われわれの誤解の結果の償いをすることになるであろうからである。

1　アベル・パスによる、ドゥルーティの未刊の伝記からの抜萃。著者の無償の許可による。（この伝記『ドゥルーティ、武装する人民』は、一九七二年、ラ・テート・ド・フーユ社、パリ、から刊行された。――訳者）

2　Manuel Buenacasa（1886―1964）　元神学生、ついで労働者。CNTの最初の書記長、新聞『労働者の連帯』の発行人。一九三六年に、バルセロナのCNT活動家学校校長。『スペイン労働運動史、一八八六―一九二六』の著者。

3　Louis Lecoin（1888―1971）　フランスの平和主義的なアナキストでアナルコ・サンジカリスト。一九一二年にフランス・アナキスト連盟の書記。一九二一年の労働組合分裂で一役を果たし、CGTUに合流し、ついで離れる。死刑を宣せられ、最終的には電気椅子に坐らされた、イタリアのアナキスト、サッコとヴァンゼッティを救おうとして、組織的活動を進める。スペインの活動家、ドゥルーティとアスカーソを擁護する。不服従と反軍国主義的宣伝のために十二年以上もの牢獄を経験する。一九三九年に宣言《即時平和を》を起草する。生涯の晩年に、良心上の徴兵忌避者の権利のために闘う。月刊紙『自由』の編集者。――

4　Louis-Emile Cottin（1896―1936）　アナキスト、ごく若くして彼は、一九一九年に首相ジョルジュ・クレマンソオを暗殺しようと企てる。死刑を宣告されるが、彼の刑は十年の禁錮重労働に減ぜられる。スペイン革命の間、絶対自由主義者民兵の戦列に加わる。

5　Francisco Ascaso Abadia（1900―1936）　絶対自由主義活動家。ドゥルーティの切っても切れない友人であり仲間。一九三六年七月二十日、アタラサーナス要塞襲撃の際に殺される。

6　José Torres Escartin（1900―1939）　絶対自由主義活動家。マルチネス・アニード知事の殺し屋による、絶対自由主義の偉大な指導者サルバドール・セギの暗殺の報復としての、カルロス・ソルデビーラの暗殺者とされている。警察の拷問ののち狂人となる。一九三一年の革命で釈放される。その精神状態にもかかわらず、フランコ派によって銃殺される。

Juan Garcia Oliver（1897―　）　イベリア半島アナキスト連盟の指導的活動家の一人。一九二三年以来、一九三一年の革命と大赦で釈放されるまで、投獄を経験する。一九三六年七月十九日のバリケードで闘う。カタルニャで、最初の民兵部隊と軍需工業を組織する。一九三七年五月まで、ラルゴ・カバリェロ政府の司法大臣になる。――

Gregorio Sobreviela　冶金工、アナキストの労働組合員。多くの殴打や襲撃事件によって警察に追われる。一九二四年二月に暗殺される。

7 Salvador Segui (1890—1923) カタルニャ人、輝かしい演説者、労働組合の組織者で、文化的中心活動家。職業別労働組合のかわりの《単一労働組合》の首唱者。一九二三年三月十日、カタルニャ知事マルチネス・アニードの殺し屋によって暗殺される。

8 Eduardo Dato スペイン政府の超反動の大統領。彼の同意の下にマルチネス・アニード知事がバルセロナで猛威をふるわせていた白色テロルに対する報復として、マドリードで、一九二一年三月八日に、CNTの精錬工たちによって暗殺される。

9 Ricardo Sanz (1900—) 建築工、一九二二年、アナキスト活動家グループ《連帯者たち》を組織する。フランスに亡命し、一九二六年にスペインに帰る。プリモ・デ・リベーラ将軍の独裁に対して陰謀を企てる。一九三一年から一九三六年の間に、いくたびも投獄される。一九三六年七月に、民兵中央委員会の戦争委員会に参加。ドゥルーティの死後、彼に代って彼の部隊を指揮する。さまざまな書の著者。

10 Gregorio Jover (1892—) 労働組合の組織者、絶対自由主義活動家。ドゥルーティ、アスカーソとともに、一九二六年七月十四日の、フランスにおけるスペイン王アルフォンソ十三世に対する襲撃計画に参加。内乱中、彼はアラゴン戦線で絶対自由主義部隊を指揮した。

11 Ferandel ルクワンの友人、言及した世論活動を進める二つの委員会の会計であった。

12 Rocker については、五〇ページを見よ。——Erich Mühsam (1878—1934) ドイツのアナキストで革命的詩人、『労働者評議会のマルセイェーズ』の著者。アナキスト著作家で荒々しく暗殺されたグスタフ・ランダウアー(一八七〇—一九一九年)とともに、ミュンヘンで六日間しかつづかなかった、バヴァリア評議会共和国政府に参加。軍法会議で十五年の禁錮に処せられ、のち一九二四年末に特赦される。一九三三年二月二十八日ナチによって逮捕され、一九三四年七月十日に強制収容所でSSによって虐殺される。(一九六八年六月の『ル・モンド・リベルテール』付録のローラン・レーヴィン『エリッヒ・ミューザム』を参照せよ)

13 Ugo Treni ウーゴ・フェデーリの仮名。一三四ページを見よ。——Camillo Berneri については、二九〇ページを見よ。——Hem Day は、マルセル・ディユー(1902—1969)の仮名。アナキストのジャーナリスト。ベルギーの反ファシスト、『思想と行動』誌の創始者。

14 Luis Companys 弁護士でカタルニャのブチ・ブルジョア政党《共和エスケーラ》の中心的活動家。CNTの弁護士となる。同時に、小農業土地所有者や折半小作農に支持される。一九三六年にカタルニャ地方政府の大統領となる。一九三六年にフランスに亡命する。ヴィシー政府によってフランコに引き渡され、フランコ派によってバルセロナで銃殺される。

15 Simone Weil (1909—1943) フランスの活動家で哲学者。ルノーの工場で働く。内乱中スペインで闘う。最後にはキリスト教徒、神秘主義者となる。若くして死ぬ。

16 Francisco Largo Caballero (1869—1946) 労働者出身、改良主義的社会主義者、労働者総同盟の書記。一九三四年のアストゥーリアス地方のストライキの際に急進化する。一九三六年九月五日から一九三七年五月十五日まで、首相

で軍事相。誇張して、《スペインのレーニン》と渾名される。

17 ドゥルーティ部隊の、カール・アインシュタインによる。

18 A・プリュドモオ『カタルニャ、三六—三七』からの抜萃。プリュドモオについては次項を見よ。

19 アンドレ・プリュドモオの『自由な土地双書』と同じく『カタルニャ、三六—三七』(一九三七年)から抜萃した文書。——André Prudhommeaux (1902—1968) 絶対自由主義の著作家でジャーナリスト。パリにおけるある労働者出版社の、ついで、ドイツの評議会運動ともスペインのアナルコ・サンジカリズムとも結びついている、ニームの印刷協同組合の中心的活動家。新聞『自由な土地』、『自由な土地双書』の標題の下での一連のパンフレット、『反ファシスト・スペイン』(一九三九年)の初期の号、ついで『新しいスペイン』を発行した。

20 A・プリュドモオ、前掲書の抜萃。

21 A・プリュドモオ、前掲書の抜萃。

22 A・プリュドモオ、前掲書の抜萃。

23 ルクテー、《神・祖国・王》の名の下に内乱のため組織され訓練された、ナバラ州の伝統主義者たちの武装グループ。

24 『自由な土地双書』(一九三七年)、の中に転載された『反ファシスト・スペイン』第四号、よりの抜萃。

25 POUM、スターリン主義的マルクス主義傾向の、マルクス主義統一労働者党。——カタルニャ主義者、カタルニャ自治主義党のメンバー。——PSUC、カタルニャ統一社会党(スターリン主義的)。

26 バレンシア、当時、マドリードを放棄しなければならなかった、共和国中央政府の所在地。